

山下氏 福島原発関連訴訟出廷



山下俊一氏

東京電力福島第一原発事故から間もない頃、「放射線の影響はニコニコ笑う人に来ない」と講演した長崎大の山下俊一教授(現・学長特別補佐)が法廷に立った。福島県内の親子らが起こした裁判で当時の言葉が問題視されたためだ。証言台の前で山下氏は「ニコニコの真意」を明かした。その内容を詳しくお伝えする。(榎原崇仁)

「緊張を解く話をした」

「ニコニコ」発言謝罪



山下俊一氏の証人尋問を控え、福島地裁前に集まった原告ら=4日、福島市で

福島地裁では四日、「無用な被ばくを強いられた」として県内の親子ら約二百人が国や県を相手取り、損害賠償を求めた訴訟の証人尋問があった。二〇一四年八月の提訴から五年あまり。原告側と被告側の双方から証人として呼ばれたのが山下氏だった。この日は濃いグレーのスーツ姿。右手にペットボトルを持って

入廷すると、小さく一礼して証言台の前に座った。

最初に被告側の代理人から尋問を受けた山下氏。第一原発が最初に爆発してから六日後の一年三月十八日に福島入りし、十九日には県放射線健康リスク管理アドバイザーの就任依頼を受けたと明かした。

続いて問われたのが二十一日に福島アルサ(福島市)であった講演だ。ここで山下氏は「危険じゃない」「避難は shouldn't」と楽観的な見方を続けた上、「ニコニコ」を持ち出した。

非科学的に思えるこの発言は、かねて非難されてきた。九年たち、「発言の趣旨は何だったのか」と問われた山下氏は「非常に強い緊張と不安がまん延していた。過度な精神的緊張は良くないという意図から話した」と明かした。

この言葉に反応したのが原告側の代理人を務めた井戸謙一弁護士。「ユーモアで語ったのか」「真剣に心配する人もいた。愚弄と受け止められると思わなかったか」とたたみかけると、山下氏は「緊張を解く話をした」「不快な思いをさせた方には誠に申し訳ないと思う」と謝罪した。

山下氏は混乱の収束を強く意識していたようだった。来県時の様子として「パニックに近く、不安定だった」「個人が冷静に判断しにくい状況にあった」と振り返り「冷静な判断ができないと多くの問題を引き起こすと考えた」と述べた。

ただ、被告側から「科学的妥当性を欠く発言はあったか」と問われると「いいえ、ありません」と断言。楽観論の喧伝を疑問視した原告側に対し、「誰も年間一〇〇ミリシーベルトを超えないと確信していた」と返した。

よどみなく過去の発言を正當化した山下氏に対し、原告側はある疑惑について質問を投げかけた。「本当は深刻な見立てをしていたのではないか」という点だ。これは昨年一月の「こちら特報部」の報

科学的妥当性主張「深刻な可能性」と発言は認めず

道に基づく。「ニコニコ発言」と同じ日、県庁内のオフサイトセンター(OFCC)で山下氏と会った放射線医学総合研究所の職員が「山下先生は小児の甲状腺被ばくは深刻なレベルに達する可能性があるとの見解」と記録していたことを報じた分だ。

「二枚舌」で市民を惑わせたのが焦点になったが、紙面の写しを差し出された山下氏は「深刻な可能性と述べた記憶はあるか」という問いに「ありません」と述べ、OFCCに行ったのも自分の意思ではなく「要請を受けた」と語った。

全体を通して煮え切らない印象を抱いたのは原告たちだった。子ども二人を育ててきた福島市の母親(金)は「ニコニコの真意」を聞き「山下さんは私たちの気持ちがあく分かっていなかった。医師や科学者というより政治家っぽいと感じた」と述べる。同じ原告で福島大准教授の荒木田岳さん(金)は「講演の発言は彼が『言わされた』と思っている」と述べ、「黒幕」をおぼろげに示すべくと訴えた。

『日本の永住者数を多くと思っか』。こん

外国人絡みの質問の前に

LINE追跡